

踏まね踏まれても生き返る

NO.7 2024.6.12

編集：発行 木村松夫

090-8646-9757

matsuokimura@gmail.com

いたばし雑草通信

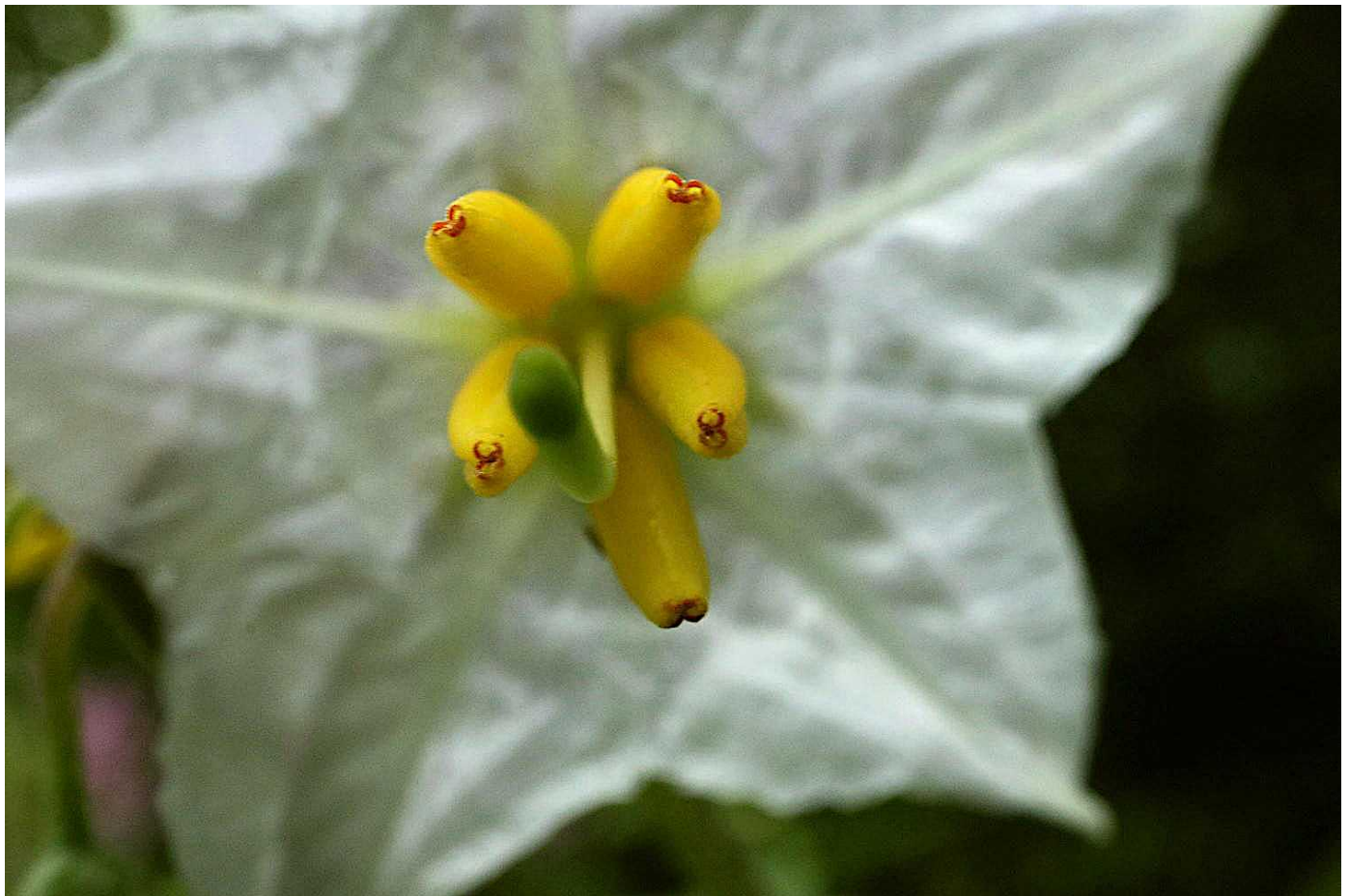
メール発信のみの情報紙です。無料購読希望の方はメールでお申込みください。鮮明画像のPDFでお送りします。

愛嬌があるワルナスビの花 ナス科 花の直径20~30mm 雄蕊の長さ5mm

そろそろ咲きました。草全体にソラニンが含まれる有毒の野草。根元から刈り取ってもかえって増えてくるとい根性がある植物。花も実もナスやミニトマトに似ていて見た目には悪くはないのですが、花を摘み取ろうとすると鋭い棘（とげ）に触って飛び上がるほどに痛いという、厄介な代物。

その棘はどこに生えているかという、茎ばかりではなく葉裏にもあるのだから、上から見ても気が付かない。ここに、人に悪さをする「悪茄子」の名の由来があるのかもしれない。

「せっかくかわいい花なんだから、悪さはしないで・・・」、と花を覗くと、黄色の雄蕊（おしべ）のてっぺんに赤いぼちりが2つ、しかもハート形。結構愛嬌があって憎めないのもワルナスビ。



子どもたちが駆け回る草原にこの植物が生えているのは確かに良くないので、公園管理では根元から全伐されてしまいます。でも、また枯れた根元から復活してくるので嫌われ者になっているのですが、赤塚公園での観察では放置していても3、4年で自然に自滅するので、どうしても好ましくない場所での除伐にとどめておいても良いのではと思います。



指定管理者制度が始まって20年

今では「安上がりの下請け」 そのもの

戦後日本経済の高度成長が破綻してしばらくたった1980年代。それまで経済成長に裏打ちされて豊かになった行政の財源で福祉施策などの充実が図られてきたのが、そうもいかなくなつて「行財政危機」が叫ばれるようになったのが1990年代。いろいろやってみたけれど、役人体質・官僚主義の非効率な行政のあり方は改められず、いっそのこと民間の事業体に施設や事業の運営を委託すると柔軟性と活力がある事業ができるのではないかと、「指定管理者制度」がスタートしたのが2003年でした。

民間企業の営利主義の感覚を取り込んだ事業運営になるので、これまでの役所直轄の下請け企業への事業委託よりもさらに「安上がりな下請け」として活用できるという「隠された目的」があったのですが、それでも、できるだけ民意を取り入れて無駄のない運営を心がけることによって、少しは活力ある事業が繰り広げられてきました。わたしたちの自然保護活動の分野では、都立赤塚公園サービスセンターは「東京都公園協会」が受託、板橋区立エコポリスセンターは「板橋エコみらいプロジェクト」という小学館・集英社プロダクションをはじめとした3つの民間事業体の複合体に施設管理・事業運営が委託されています。

しかし、この指定管理者制度、発足から20年もたつと矛盾が目立ってきています。自然保護・環境保護関係では年々新しい課題が出てきて、それに対応する新しい事業が作り出されてきているのに、予

算はほとんど増えず、仕事が増えたのにスタッフは減るばかり。無償で動くボランティアからみても、指定管理者事業体のスタッフは業務過多・人手不足の中で働かされていて、もうかわいそうになるぐらいの深刻な状態です。都庁舎を何だらマッピングで飾るお金の40分の1でも自然が残された公園にお金をかけてくれたら、立派に「都会の自然」を守る事業が出来るのと思うのですが、現実には真逆の方向で進んでいます。

事業者とボランティアは 対等な事業主体としての 協働関係を作るべき

従来からのボランティアには、行政と強力な関係を形成して、自分たちの課題を「行政をして為(な)さしめる」利権関係型依存の体質が強くしみついでいて、要求を受け入れない行政には「何にもやらない」とか「だからダメなのだ」と非難してきたのですが、その非難は今では無理難題を突きつけているに等しいものになってきました。そういうボランティアは返上したほうがよいと思います。

ボランティア側は自治の精神で自主・自立の活動を進め、行政側はボランティアを事業推進の対等な相手として位置付けて、同じ目的に向かってそれぞれが自分たちの力を出し合っていく真の意味での協働関係を組み立てていかなければ、都会のみどりも住みやすい環境づくりの未来もないと思います。

ねじれたネジバナか？ 協働するネジバナか？ ラン科

上のようなことを考えながら高島平団地の横を歩いていたら、草地にネジバナ発見。

「おや！ このネジバナ、2本の花がねじれている！」と思って目を近づけてみたら、同じ背丈のネジバナが並んで花を付けているだけでした。この2本のうち1本が大きくて隣のネジバナに絡んでいたら「ねじれた関係」なのですが、同じ大きさの2つが同じ方向を向いて並んでいるとハートの形になり相互に共鳴しあって、これが「協働」と、見本を見たような気分になりました。

今年は高温多湿の気候が多くて、地中のラン菌が繁殖しているのかもしれませんが、ネジバナそのものは比較的あちこちで観察できます。

